

眩しかった。

天窓から降り注ぐ陽光が、謁見の間を白く染め上げている。正午の光は容赦なく、広間の隅々まで影を追い払っていた。

だが玉座の前だけは違う。一段高く設えられたその場所には、深い影が落ちていた。逆光の中に座る男の顔は見えない。ただ琥珀色の瞳だけが、獣のように光っていた。

「陛下。こちらが三日前に捕えたフェルメスの第二王子イリアスでございます」

私を連行してきた兵士が、玉座に向かってひざまずいた。

国を亡くしたとはいえ、元王族に敬称すらつけない。無礼な輩だった。

私は兵士に膝をつかされそうになったが、拒んだ。

背後には同じく捕えられた忠臣たちがいる。たとえ両手を鎖で繋がれよ

うと、戦火に遭ってみすばらしい姿になろうが、彼らの前で敵国の王に膝をつく気はなかった。

「貴様、控えよ」

兵士たちが首を掴み強引に膝をつかせようとしてきたが、私は断固拒否した。

「どうせ処刑するのであろう！ さつさと首を刎ねるなりしたらどうだ！」私の声が広間の高い天井に吸い込まれていった。

謁見の間に居並ぶ奴の側近たちがざわめいた。

「陛下の御前でなんと愚かな……」

「アレに当てられて死ぬだけよ」

「死ぬだけで済めばいいが——」

なんだ？ 何を恐れる必要がある。

兄は戦場で討ち取られ、父は城と共に焼け落ちた。残ったのは第二王子

たる私のみ。さっさと首を刎ねてしまえばいいものを、わざわざ謁見の間まで引き立ててくるとは趣味が悪い。

敵国の側近たちのざわめきは更に広がりを見せた。誰もが信じられないという顔で私を見てくる。私には彼らの反応こそ意味が分からなかった。つと玉座から、低い笑い声が響いた。

「ははっ、面白い」

男が立ち上がった。逆光の中から、その姿が見えた。

黒髪に琥珀の瞳。野性味あふれる精悍な顔立ち。戦場を駆け抜けてきた者特有の苛烈さが、全身から滲み出ていた。

ヴェルナル・アルドレイク。

周辺諸国を次々と呑み込み、今や大陸の覇権をその手に握る「霸王」。私の祖国を、父を、兄を殺した仇敵。

「貴様、オメガか」

「は？」

「知らんのか。まあ、無理もない。お前の国では『神の手違い』として片付けられてきたのだろうしな」

——神の手違い。

その言葉なら聞き覚えがあった。

時に男が同性を狂おしいほどに欲し、果ては殺人まで犯す出来事が起きた時、人々はそれを「神の手違い」と呼んで口を噤んだ。

だが今この場でそんな有様に陥っている人間は誰一人いなかった。

困惑していると、ヴェルナールが玉座に坐したまま、指を鳴らした。

刹那、私の世界が歪んだ。

（転移の魔術——！）

ふわりと身体が浮いた先は奴が座る玉座の真上だった。そのまま重力に沿って、身体が落下する。

気づけばヴェルナールの腕の中だった。

「陛下、おやめください！ 滅んだとは言え、敵国の者ですぞ——」
謁見の間にいた奴の側近たちが、にわかには色めき立つ。

「黙れ」

その一言で側近たちは押し黙った。魔術の一種かと思うほど、あからさまな怯えぶりだった。まるでしつぽを巻いた子犬だ。

一体なにが……。

するとヴェルナールに顎を上向かされた。

「見目は良いな。尻の形も良い。安産だろうな」

「なっ」

身体を密着させられる。ここ数日ろくな物を食べていないせいで、体格の違いは明らかだった。

だがこれは千載一遇のチャンスでもあった。祖国の仇が手の届く場所に

いる。

手元に武器はない。だが、それがどうした。この手と鎖さえあれば……。私は両手を繋ぐ鎖をヴェルナールの首にかけようとして、

「——うん……ッ！」

失敗した。

唇に熱くて柔らかいものが押し付けられる。熱い舌が、私の口に侵入してくる。齒列をなぞり、舌を絡め取り、粘膜を舐め上げる。同時に、大きな手で尻を鷺掴みにされた。

屈辱だった。

生まれてこの方、誰にもこのような真似をされたことはない。祖国では常に王族として敬意を払われ、乱暴されることなど一度としてなかった。それが今、仇敵に口を犯されている。しかも衆人環視の中で。

怒りで、視界が赤く染まった。

私は反射的に手を振り上げ、ヴェルナールの頬を打った。

鈍い音が響く。ヴェルナールの唇が切れ、血が滲んだ。

だが奴は笑っていた。満足げに、さも愉快そうに。

「俺と口を交わしても、なお正気を保ってられるか。ますます気に入った」

何を言っているのか分からない。

口づけを交わしたからといって、それが何だというのか。

広間がざわめいている。奴の側近たちが、信じられないという顔で私を見ていた。

「まさか……陛下の威光に当てられぬ者が、本当にいるとは……」

「聖体とは、そういうものなのか。なんと恐ろしい」

まただ。

聖体、オメガ。

知らない言葉ばかりが耳に入ってくる。

唯一分かっていることは、この男は私を殺すつもりがないという事だけ。「イリアスと言ったな。この世には男女以外にもう一つ性があるということだ」

「は？」

「陛下！ 栄えあるアルファであらせられる方が、田舎者にわざわざばらすなど——」

「俺は黙れと言ったぞ。ゾンバルディア」
口ひげをたくわえた壮年の男——ゾンバルディアが胸を押さえた。一瞬で呼吸困難に陥り、周囲の側近が支える。

「言霊でも操るのか、貴様……」

ヴェルナールは琥珀の瞳を細めた。豹を思わせる視線だった。

「アルファの発する言葉は、それだけ凡愚には脅威だと言うことだ」

「お前が死ぬと言えば、彼らは死ぬのか？」

「まあ、そうだな」

ヴェルナールは眉根一つ変えない。

「だが唯一、俺の言葉が毒にならぬ者がいる。それがお前だ」

ヴェルナールが節くれだった指で私を指し示した。そのまま頬に手を添えられて、囁かれた。

「オメガの孕む子はアルファと決まっている。だからこの話を知る者は皆、お前を求める。当然、俺もな」

この男の言っていることはおかしい。

なぜなら――

「男が子を孕むなど、馬鹿げている！」

「ふふっ、はははっ」

謁見の間にヴェルナールの哄笑が響き渡った。

「何がおかしい！」

「おかしいとも」

ヴェルナールの手が私の腹部に添えられた。節くれだった太い指がへその辺りからゆっくりと両足の付け根で止まった。あとほんの少し指をさげれば私の性器にふれてくる。そんなきわどい場所を奴は指で指ししめた。

「俺の子種を唯一孕める人間に言われれば、嗤いたくもなる」
とんとん、と奴の指が私の下腹を軽くこづいた。

「どれだけ注げば孕むかな。お前の子宮は」

「そんなものは無い！」

「いいや、あるとも。必ずな」

ヴェルナールが不敵にほほ笑んだ。

違うと否定したいのに奴の側近たちの態度が、全てを物語っていた。

第二の性は実在するのだと――

「特に俺の種は強すぎて普通のオメガでは耐えきれんのだが、お前は違
うようだ」

顎をくいっと持ち上げられた。

「俺と目を合わせてしゃべれた者はお前が初めてだ。イリアス」
ぞくりと背筋に寒気が走った。

琥珀色の瞳がねばついた視線で私の身体を観察していく。

今日、初めてこの男が怖いと思った。離れようとすれば、胸元へ強く抱
きしめられた。汗と血の匂いに混じって、甘く重い何かが鼻を刺す。頭
がぐらりとした。

ヴェルナールが私を腕に抱いたまま、玉座から立ち上がる。

「聞け。本日をもって、俺の王配はイリアスとする」

その宣言が響くと広間は静まり返った。そして次の瞬間、騒然となった。

「陛下、なりません」「敗戦国の捕虜を王配にするなど、あってはならぬ事態」

「イリアス様、そのような男の妻になるなど、父君と兄君が見たらどう思われるか！」

ヴェルナールの側近と私の忠臣たち、双方から悲鳴が上がった。謁見の間は怒号と嘆願が入り乱れた。

私は、その喧騒の中で、ヴェルナールを見上げていた。

王配——それはこの男の妻にさせられるということだ。冗談ではない。だがもしこの男の王配になれば、私の忠臣たちも生き残る可能性が出てくるのではないか。

私は抱きかかえられた状態で、ヴェルナールを見つめた。

「お前の王配になると言えば、どうなる？」
ヴェルナールの口元が、ゆつくりと歪んだ。

「そうだな……」

もったいぶった調子で、男は言った。

「まず、そこにいる連中は生かしてやろう」

私は思わず、背後を振り返った。

鎖に繋がれた忠臣たち——幼い頃から仕えてくれた者たち。兄の側近だったレイン。彼らを助けられるのならば、この申し出は受ける価値があるかもしれない。

だが、そこへ待ったがかけられた。

「なりません、殿下！」

レインが髪を振り乱して、叫ぶ。

「そのような輩の誘いに乗って、我らを助けるなど。殿下の誇りを汚すことになります！」

レインらしい言葉だった。だが、皆が同じ気持ちとは限らない。

「はっ、貴様はそうだろうよ！ 親も子もないからな」

レインの言葉に忠臣たちの一団から、容赦なく水が差される。

「だが我らには家族がいる！ 生きて帰れるのなら殿下の誇りなど、連中にくれてやればいい」

「貴様、殿下を売って生き延びようというのか！」

「死にたい者は勝手に死ね！ 俺は——」

罵声が飛び交いはじめる。つい先ほどまで共に捕らわれの身だった者たちが、互いの胸ぐらを掴み、いがみ合っていた。

「人とは生きられると思うと、かくも醜悪になるのだな」

ヴェルナールが、愉快そうに笑った。

「貴様……！！」

まるで悪魔だ。私は齒を食いしばった。この男はわざとやっているのだ。私を試すために。

「なに、お前が助けてやればいい。違うか？我が妻よ」

せせら笑う声が、私の耳を打つ。

背後ではまだ忠臣たちが言い争っている。奴の側近たちのざわめきも収まらない。徐々に広間中の視線が、私に集中しだした。

ここで拒めば、忠臣たちは殺される。きっと今よりもっとひどい怨嗟をまき散らして、死んでいくだろう。これ以上、彼らを貶める真似はさせなくなかった。

私は唇をきつくかみしめた。選択肢などあるはずもない。

私は長い沈黙の後、口を開いた。

「……分かった。貴様の王配になってやる」

ヴェルナールが鼻で笑った。

「足りぬな」

「……何？」

「俺の王配になるのだ。ここで皆に宣言しろ。俺の妻になると」

奴の言葉に全身の血が沸騰した。この男はまだ私を辱めようというのか。

「できぬのなら、そうだな——」

ヴェルナルは、芝居がかった仕草で顎に手を当てた。

「お前ご自慢の忠臣たちには、地下牢で飢えと渴きを味わってもらおう。何日持つかな？」

この男は本気だ。

そう確信した瞬間、全身の力が抜けそうになった。

これ以上、抵抗しても無駄だ。この男は私が折れるまでいくらでも残酷になれる。そしてその残酷さを心から楽しんでいる。

私は指が白くなるほど強く拳を握り締めた。

「……分かった」

声が震えないよう、必死に喉を絞る。

「……私は、お前の妻になることを、誓う」

言葉が、喉を灼いた。

屈辱に濡れた瞳で、私はヴェルナールを睨み上げた。

「これでいいか？」

ヴェルナールの顔に、初めて満足の色が浮かんた。

「ああ」

男は私の顎を掴み、顔を上げさせた。

琥珀の瞳が私をじっと見つめてくる。そこにはもう慈悲も嘲りもなかった。ただ貢物を当然の態度で受け取った霸王の傲慢さがあつた。

「許す」

ヴェルナールの声が、謁見の間に響き渡つた。

私は拳を握りしめたまま、何も言い返せなかつた。



婚姻から三ヶ月が過ぎた。

私は王配として、奴の城で暮らすことになった。

与えられた部屋は広く、食事也十分に出される。侍女たちは表面上は丁寧だが、その目には隠しきれない敵意があった。

護衛の騎士は監視役も兼ねているのだろう。必要以上に声をかけてくることはなかった。

唯一の幸運は、夜伽を命じられなかった点だ。謁見の間での出来事以来、ヴェルナールが私の寝室を訪れることはなかった。

だがいつかは呼び出される時が来る。そのことを考えると、憂鬱だった。奴から王配として与えられた仕事は、外交の宴で王の隣に座ることだけだ。

隣国からの使節を迎える席には、必ず同席を求められた。しかし発言を求められることはなかった。

一度も。

奴の隣に座り、美しく微笑んでいればいい。それだけだ。もはや高価な調度品に等しかった。

虚しい。

毎日が獄に繋がれたも同然だった。そんな時、事件は起きた。

「貴様が陛下の王配か？」

次回の宴で着る衣装の採寸を行った帰りだった。騎士たちの訓練場近くを通った際、声をかけられた。

振り返ると、二十歳そこそこの若い騎士が立っていた。金髪を短く刈り込み、うろんな目で私を睨みつけてきた。

——またか。

奴の信奉者だ。この城はとにかくヴェルナールを神のように崇める人間ばかりが集まっていた。彼らにとつて、ヴェルナールは神聖不可侵の唯一絶対の王なのだ。その彼が敗戦国の捕虜を妻に迎えるなど、あつてはならない事態だった。たとえ私が希少な「オメガ」であろうと、彼らから見れば「神」の威光を穢す汚点でしかない。

青年の声を皮切りに、次々と騎士たちの視線が私に集まった。

敵意。嫌悪。憎悪。

もう慣れたが、気持ちのいいものではない。

「そうだが、何か？」

私は訓練場の回廊で足を止めた。

周囲の騎士たちが、訓練の手を止めてこちらを見ている。誰も止めに入る気配はない。むしろ、何かを期待するような空気すら漂っていた。

「陛下の子を産むためだけに飼われている雌犬が、ずいぶんと偉そうに

歩くものだな」

若い騎士が一步近づいた。周囲の騎士たちは動かない。止める者は誰もいなかった。

「陛下が貴様を生かしているのは、孕む穴が必要だからだ。もう少し自覚しろ」

私は黙って聞いていた。

この手の輩は相手にするだけ無駄だ。何を言っても聞く耳を持たない。だが、その態度がいけなかったのか、若い騎士の目が急に凜猛な光を帯びた。

「あの方は大陸の覇者となるべきお方。その伴侶はこの国の誰よりも高貴で清らかで、美しい者でなければならぬ」

この男は本気でそう信じているのか。今までにも奴を妄信する輩はいたが、彼は極めつけた。

「貴様のような穢れた売国奴に、陛下の王配は過ぎた身分だ！」

「なっ……」

誰が好き好んで奴の王配になどなるものか。言わせておけば、この男

――！

「やってしまえ」

誰かが呟いた。小さな声だったが、はつきりと聞こえた。

「どうせ陛下も、本気で王配になさるつもりはない」

そうだ、そうだ！と同調する声が訓練場に広がっていく。

いいだろう。私だって、女のように守られるのはごめんだ。

私は背後を振り返り、護衛の騎士に迫った。

「剣を貸せ」

「なりません。御身の肌を傷つける物は一切渡すなと陛下に申しつけられておりますゆえ」

護衛は頑なだった。彼もまたヴェルナールの狂信者と言えた。

「その言葉、あとで奴にも言うのだな」

「イリアス殿、お待ちを！」

護衛が私を守ろうと前に出れば、他の騎士たちが行く手を阻んだ。あつという間に、私と若い騎士を取り囲む人垣ができあがる。

「剣もなしに出てくるとは笑えるな。まあ、貴様に必要なのは剣を握る手じゃない——陛下の種を受ける穴だけだしな」

「そうだな。貴様はヴェルナールの子種ももらえぬ凡愚らしいしな」

「貴様っ！」

若い騎士が腰から剣を引き抜いた。ぎらりと昼の光に刃が反射する。青年が一気に剣を振り上げる。白刃が陽光を反射し、鋭い光を放つ。

「イリアス殿！」

護衛の叫ぶ声が聞こえた。

これでいい。父も兄も死んだが、王配となることで部下の命も守ることができた。王族としてやれる事は成し遂げた。奴に抱かれるくらいなら、いつそのまま――、

迫る刃を私は目をつむることなく、真正面から受け止めた。

これで私は自由だ。

そう思った瞬間、青年の腕が寸断された。赤い血飛沫をまき散らして、ちぎれた片腕が空を舞う。数秒遅れて、訓練場の固い地面に斬られた腕と剣が落ちた。

「……え？」

「――ぎゃあああああ！」

一拍遅れて片腕を失った騎士が絶叫し、のたうち回った。訓練場は一瞬で静寂に包まれた。

何が起こった？

すると私と騎士を取り囲んでいた人垣が一斉に崩れた。騎士たちが様に膝をつく。

背後から謁見の間で嗅いだ奴の匂いがした。汗と血の匂いに、身体の奥底がうずく香り。節くれだった指が私の頬についた血をぬぐい、私の銀髪を優しくすいた。

「俺の妻を殺す権利は」

私の背後にヴェルナールが立っていた。彼の手のひらにはわずかに魔力の残滓が残っていた。小さな風がゆっくりと訓練場に残っていた砂埃を散らした。風の魔術で騎士の片腕を文字通り切断したのだ。

「いつ貴様の手に落ちた？」

「へ、陛下——」

若い騎士の顔が恐怖と痛みと歓喜で歪む。崇拜する神が目の前に現れたのだ。だがその神は、彼の片腕をたった今奪った神でもある。

訓練場は水を打ったように静まり返っていた。

「私は陛下のために、その売国奴を——」

「片腕では学び足りぬか」

めきり、という音がした。骨が折れる音だ。

若い騎士に唯一残された片腕が不自然な角度に持ち上げられていた。風の魔術だった。

「ああああッ！」

若い騎士が再び絶叫した。ヴェルナールは表情ひとつ変えずに、その腕を折り曲げていた。

「陛下、お待ちください！あの者は陛下を慕うあまり——」

誰かが止めに入ろうとしたが、ヴェルナールの一瞥で凍りついた。

「俺のものに手を出したのだ。——腕一本で済んだことを感謝しろ」
ヴェルナールの声は、静かだった。怒りすら感じさせない、平坦な声。

それがかえって凄味を増していた。

若い騎士は肩から血を流しながら何度も頷き、神の慈悲を請う。

騎士たちは皆、顔を青ざめさせて立ち尽くしていた。先ほどまで神を崇めていた者たちが、今は神の怒りに怯えている。

ヴェルナールはもう若い騎士への興味をなくしていた。

呆然としていた騎士たちの一人が、ようやく我に返り仲間たちに呼びかける。

「だれかこいつを医務室に運んでやれ。腕も一緒にもって行ってやれ。まだくつつくかもしれない」

騎士たちが慌てて動き出し、若い騎士を訓練場から運び出す。彼は血を失いすぎたのか気絶していた。唯一残った腕は不自然な角度に曲がったままだった。

私はその光景を黙って見ていた。

「イリアス」

名を呼ばれた。振り返ると、ヴェルナールが私を見下ろしていた。

「怪我はないか？」

「ああ。その……助かった」

「お前は俺の大事な妻だからな」

するとヴェルナールが私の顎を持ち上げた。謁見の間の時のような不意打ちはごめんだ。さっと顔をそむければ、頬にキスを落とされた。

予想外の場所で私は目をみひらいた。

「どうした？」

「いや……」

思っていたよりも優しい口づけで驚いただけだ。

「唇の方が良かったか？」

頭上からヴェルナールのからかう声が降ってくる。若い騎士にはあれほ

ど冷酷な態度だったというのに。

「お断りだ」

ヴェルナールの分厚い胸板を押し返しても、彼は笑うだけだった。こういう時どちらが本当の彼なのか、分からなくなる。

「お前は俺の妻だ。必ず俺の子を産む。これは決定事項だ」その言葉には有無を言わせぬ力があつた。

「……勝手なことを言うな」

私はヴェルナールの身体を今度こそ押し返した。

「お前がみずから俺を求めるまで気長に待つさ」

そう言われてひとつ、気になった。気長に待つ、と彼は言うが本当に可能なのか。

「己の性欲に負けたらどうする？ 私を力づくで抱くか？」

意地の悪い質問だと自分でも思ったが、気になるのも事実だ。

さしもの霸王として動物だ。己の本能には勝てない。

しかしヴェルナールは不敵に笑った。

「この世には己の性欲を抑制し、溜め込む魔術がある。お前が俺を欲した時、すべてを注いでやる」

ヴェルナールの腕が私の腰を撫で、へそのあたりで止まった。純白のローブがかすかに揺れる。

「お前の腹にな」

ぐつと腹を押されれば、そこからヴェルナールの種が入り込んでくる気がした。

私は彼の手を叩き落とした。きつく睨みつけるも、彼は笑ったままだ。

「実にそそられる。お前が俺に屈する時が楽しみだ」

からからと笑って彼は、踵を返していった。

訓練場に私はしばらくの間、立ち尽くしていた。



一週間後、王城の大広間に隣国からの使節団と高位貴族たちが集まっていた。

今夜は重要な外交の宴。ヴェルナールの隣に座り、私は王配として振舞っていた。

純白の礼服に身を包み、白い絹の手袋で覆った手を膝に置く。銀髪は侍従たちの手によって結い上げられ、蒼水晶の髪飾りで留められていた。

「実に愛い」

ヴェルナールが隣から手を伸ばし、私の耳朶にふれた。髪飾りと揃いの蒼水晶の耳環が奴の太い指に弄ばれる。いつもならその指を叩き落とすのだが、今夜は宴だ。隣国から訪れた賓客の前で、霸王との不仲を見せ

れば、いらぬ誤解を招く。

よって大人しくしていたらこれだ。

（貴様は子どもか）

私が静かにしているのが、よほど楽しいのかヴェルナールの手は普段よりも一層なれなれしかった。

「王配殿下は本日も実にお美しい」

隣国の使節団の一人が席上に近づいてきた。脂ぎった丸顔に、にこやかな笑みを貼り付けている。だがその奥に意地の悪い敵意が潜んでいるのが見え見えだった。

「であろう？ 俺の自慢の妻だ」

ヴェルナールに肩を抱き寄せられた。ふわりと彼の胸元から、あの独特の甘い香りが鼻をくすぐる。常人であれば嗅いただけで腰が抜けるほど強い香気らしいが、私にはほんのり香る香水程度のもだった。

「……しかし亡国の王子が、今や霸王の妻とは。なんとも運命の皮肉を感じさせられますな」

男の目が私の純白の衣装を舐めるように見つめてきた。胸元に始まり、腰から爪先までねっとりとした視線が絡みついた。

実に嫌な目だ。

男の声を耳にするだけで胸がむかむかする。原因は分かっている。この男は最初からヴェルナールに向けて言葉を発している。

王配である私など、所詮ヴェルナールの所有物だと思っている。いつもなら黙ってやり過ごしただろう。だがこの男はあの『国』の人間だ。このまま波風を立てずに終わらせるなど、無理だった。

「それはそれは。貴殿の言葉に亡き父もさぞ驚くことでしょう」男がぎよっとして私を見た。置物から反論が返ってくるのは予想外だったらしい。ヴェルナールが楽しげに見つめてくる。

「それはどういう意味かな。王配どの」

周囲の空気が張り詰める。私は男の言葉には答えず、給仕から悠然とグラスを受け取った。優雅な仕草でワインを口にした。

この場における地位を、きちんと分からせてやる必要があった。私は男を冷たく一瞥した。

「同盟とは窮地にこそ真価が問われるもの……我が父に『現実』を突きつけた国の方が言うと、重みがありますね」

男の丸顔が一気に引きつった。周囲の貴族たちから、失笑が漏れて、さざめきのように伝播していった。

かつて我が国と同盟を結んでいたくせに、一兵も送らず事態を静観していた国——それが今宵の客人たちだった。

なにが運命の皮肉だ。その面を鏡で見えてくるがいい。

私は悠然とグラスを掲げた。

「貴殿の国に栄光あらんことを」

居並ぶ客たちや側近が、失笑を湛えたままグラスを同様に掲げた。男は苦笑いを浮かべてはいたが、その目は恥をかかされた怒りで燃えていた。ざまあみろ。喧嘩を売りたいのなら、もっとスマートにやることだ。

男が顔を真っ赤にして、憤然と去っていく。私はその後ろ姿を冷たく一瞥したあと、グラスに残ったワインを飲み干した。気づくとヴェルナルがじっと私を見ていた。

「なんだ？」

「お前はもっと喋るべきだな。誰もお飾りだと思わなくなる」

「今宵は例外だったただけだ」

ヴェルナルから顔をそむければ、蒼水晶の耳環がしやらしやらと音を立てた。ヴェルナルが指で耳飾りを持ち上げる。

「今宵はお前の瞳に色を合わせたが、次は琥珀はどうだ」

「貴様の『色』を身に着けるなど、吐き気がする」

奴の側近たちに聞こえぬよう小声で反論すると、ヴェルナールは琥珀の瞳を嬉しそうに細めて笑った。

「いつもの調子が戻って来たな。いいぞ」

私は抱きついてきたヴェルナールを目立たぬよう、適当にあしらった。それから半刻ほど経ったころ、給仕長が銀のトレイを手に私たちのもとへやってきた。

銀盆には、透明な金剛晶で作られたグラスが三つ並んでいる。琥珀色の液体がなみなみとグラスに注がれ、宝石のごとく煌めいた。蜂蜜酒だった。

「聖杯の契りでございます」

——それは王と王配、そして賓客の代表である隣国の大使三名が杯を口にする事で、神々に友好を誓う古の儀式だ。

拒否すれば、それは宣戦布告に等しい。ゆえに契りの杯は必ず飲み干す必要があった。

ヴェルナールが玉座から立ち上がり、大広間の中央に立った。使節団の長である大使も進み出る。私も王配としてヴェルナールの隣に立つ。ヴェルナールが傲然とした態度で杯を頭上に掲げた。

「永遠なる盟約に」

大広間にいる人間全てが同様に杯を掲げて、唱和した。

私は給仕長からグラスを受け取り、蜂蜜酒を見つめた。甘い香りが鼻を刺激した。私はためらうことなく、杯を飲み干した。

甘い液体が喉を通り過ぎていく。舌に残る微かな苦味は蜂蜜酒特有のものか。

飲み干せば、大広間は歓喜の声に包まれた。万雷の喝采が大広間を満たしていく。その時あの脂ぎった丸顔の男がほくそ笑むのが見えた気がし

た。

（気のせいかな……？）

儀式は滞りなく終了し、給仕長や侍従たちが下がっていく。

私は次の客人を迎えるため、ヴェルナールに手を引かれて壇上の席へと戻る。夜はまだ長い。王配としての務めはまだ続く。

だが数分後、異変が起きた。

身体が熱い。

最初は広間の熱気と酒のせいかと思ったが違った。身体の奥底から、じわじわと熱が湧き上がってくる。

心臓がどくどくと早鐘を打ち、額に脂汗が滲む。

（なんだ、これは……）

腹の奥底が無性にうずく。強烈な何かで満たされたい。そんな欲望が脳裏をよぎった。

（……毒でも盛られたか？　いいや、それなら苦痛が先に出るはず、まさか……媚薬？）

とつさに自分の口元を手でふさぎ、衝撃を周囲の人間から隠す。

私は鋭い視線であたりを見回した。

先ほどの丸顔の男が、人垣の向こうからニヤついた顔で私の様子を眺めているのを見つけた。

（あの……豚め！　いや、遅効性の毒と言う可能性もある。ここは一度、部屋に戻って……）

「どこへ行く？」

ヴェルナールに手首を掴まれる。触れた指先から火傷かと思うほどの強い熱が伝わってくる。

（これはまずい……！）

直感的に手を引くが、ヴェルナールの指は鋼のように硬く、びくともし

なかった。

「少し、気分が……」

私は咄嗟に言い訳を口にした。だが声が掠れていた。喉の奥が灼けるように熱い。

「顔色が悪いな」

頭上から降ってきたヴェルナールの声。

そこには慈悲など欠片もない。あるのは、罠にかかった獲物を楽しむような嗜虐的な響きだけ。

「……離せ。少し風に当たりたいだけ……ッ」

吐き捨てた声が震える。視界がぐにやりと歪み、立っているだけで精一杯となった。

ただの熱じゃない。血管の中を溶岩が流れているようだ。ヴェルナールに掴まれた手首から、あられもない熱量が流れ込んでくる。その熱が私

の心臓を鷲掴みにし、全身の血液を下腹部の一点へと暴力的に集めていく。

「く、うう……ッ」

堪えきれず、唇から甘い吐息が漏れた。

その瞬間だった。

身体の奥底で、何かが弾けた。

どくりと心臓が早鐘を打ち、全身の毛穴という毛穴から濃厚な香りが噴き出した。

熟れた果実が腐り落ちる寸前のような、むせ返るほどの甘い蜜の匂い。自分でも分かる。これは理性を溶かすような強力な媚香——『情欲の香氣』だった。

（まずい……！）

必死に息を止めるが、逆効果だった。我慢したことで肌が上気し、熱氣

と共に香りが広間へと爆発的に拡散していく。

ざわり、と大広間の空気が変わった。

先ほどまで談笑していた貴族たちが、一斉に動きを止める。がしゅん、と誰かがグラスを取り落とす音が響いた。それが合図となって、広間のあちこちで異様な衣擦れの音が立ち始める。

理性のタガが外れていく。

着飾った貴婦人がドレスの胸元をはだけ、紳士が獣のような雄叫びを上げて覆いかぶさる。

例の丸顔の男は理性を失った貴婦人たちに尻を蹴られ、罵倒され恍惚とした顔を浮かべていた。

「な……ッ!？」

信じられない光景に、思考が追いつかない。

「壮観だな」

ヴェルナールの低い声が、耳元を打つ。

彼だけが、この狂乱の中で平然としていた。琥珀色の瞳は、むしろこの地獄絵図を楽しんでいるようですらある。

「貴様……これは……」

『傾国の魔香』——国一つを愛欲で滅ぼすという伝説の魔性の香りだ』
ヴェルナールが私の腰を抱き寄せ、耳元で囁く。

「もっとも、お前単独では発現し得ない。これは俺の『王気』がお前の体内で暴れ回り、眠っていたオメガの本能を無理やりこじ開けた結果だ」
「なんだと……？」

「凡俗なオメガなら俺の熱量に耐え切れず焼き切れるが、お前は違う。俺の熱を受け入れ、それを極上の媚香へと変換して排出したのだ。つまり、この香りは俺がお前を内側から支配した証拠。周囲の連中は、俺の支配の余波に当てられて狂っているに過ぎん」

傲慢な理屈だった。

だが、現実には彼は平然としている。周囲の貴族たちが愛欲の泥沼に沈んでいく中で、彼だけが支配者として君臨していた。

「周りを見てみる。お前の匂いを嗅いだけで、乱れ狂っているぞ」
ヴェルナールに顎を掴まれ、無理やり広間を見せられる。

あちこちから聞こえる、粘着質な水音と嬌声。

ちゅぱ、ぐちゅ、ぱんっ、ぱんっ——。

卑猥な音が大広間に反響し、異様な熱気が渦巻いている。

「あいつらを狂わせたのはお前だ。責任を取らねばな」

「責任……？」

「お前もまた、その淫らな身体を俺に晒して償うのだ」

言うが早い、ヴェルナールの手は私の礼服のボタンに掛けられた。
ぶちっ、と乱暴な音を立てて、胸元が大きく開かれる。

「や、やめ……っ！」

抵抗しようとしたが、身体に力が入らない。香気の影響は私自身にも及んでいた。肌が粟立ち、わずかな刺激にも過剰に反応してしまう。

「いい色だ。興奮して張り詰めているな」

ヴェルナールに胸を露わにされる。

白磁のような肌の上で、私の乳首はすでにカチカチに勃起し、桜色に充血していた。

恥ずかしい。こんな姿を、衆人環視の中で——いや、誰も私など見ていない。彼らは互いの快楽に夢中だ。

だが、それが逆に興奮を煽る。

「……ッあ♡」

ヴェルナールの太い指が、尖った乳首をつまみ上げた。

たったそれだけで、脳天を突き抜けるような快感が走る。

「ひ、あッ……!？」

「なんだ、この感度は。つまんだだけで腰が跳ねたぞ」

「ちが、う……はな、せ……っ♡」

「嘘をつけ。こんなに硬くなっている」

ぐりっ、と指先で乳頭をこね回される。

痛くない。むしろ、甘く蕩けるような痺れが胸から全身へと広がる。

「あッ、んうッ……! あぁ……ッ♡」

「ほら、もつとよく見せてみる」

ヴェルナールは私を後ろから抱きすくめると、その逞しい腕で私の胸を強調するように持ち上げた。

まるで供物のように、勃起した乳首が空気に晒される。

「見ろ、イリアス。お前の乳首は、こんなにも卑猥に尖って、俺の指を求めている」

「み、みるな……っ、いうな……っ♡」

「声が震えているぞ。恥ずかしいか？それとも、気持ちいいのか？」

「んあッ♡ひっ、あぁッ♡」

ヴェルナールが、今度は舌を這わせた。

ザラリとした舌の感触が、敏感な乳輪をなぞり上げる。

「ひいッ!?や、あッ……♡」

「甘いな。まるで蜜だ」

彼は乳首を唇で食むと、ぢゅると音を立てて吸い上げた。

吸いつくされ、乳首の穴を爪でかりかりと軽く引っかかるたび、脳髓を焼き切るような痺れが走る。

「ぐッ、……ッ！吸うな、すうなあ……ッ♡」

「嫌がっている割には、もっと吸えと膨れ上がっているぞ」
ぢゅ、ぢゅぼっ…。